特集 教科書の徹底活用

基礎学力と教科書活用

今井裕之
（兵庫教育大学）

1. 中学英語の基礎学力とは何か

「英語教育のプロならば，こう問われて即答できねば！」そんな強迫観念はありませんか。全くないのはどうかと思いますが，即答できないからといって，「だから私はダメな英語教師なのだ」と落ち込むこともないと思います。なぜなら「基礎とは何か」という問いは，「応用」「発展」との組み合せで相対的に説明しなくてはならない上に，学力の構成要素の組み合わせ方やその発達のプロセスは一様ではないからです。「1 年生の 1 学期のこの時期には何を教えることが基礎として重要か」という限定でもあれば即答もできましょうが，そうでなければ，簡単に 3 年間でつける学力の基礎部分を語ることはできません。本誌でもこのテーマが繰り返し取り上げられるのはそれゆえでしょう。

そんな多様な解のある問いに対して多くの英語教育者たちが集まって知恵を絞って一つの英語学力観に収斂させたものが教科書であるといえます。その教科書の提供する情報を活用し，何が基礎で何が応用，発展かを知るためには，「教科書リテラシー（教科書の仕組みや意義を読み解く力）」とでもいうべきものが要求されると思います。以下では，6 社から発行されている教科書を通読し，基礎学力養成のポイントとして重要だと感じたことを述べたいと思います。

2. 教科書を活用することで身につく基礎力

教科書は，学習内容と学習・指導方法のデータベースであり手引書です。授業中にも，家庭学習にも活用されますが，そのような「学びの友」としての教科書の役割を以下に示します。

	果たしている役割	さらに期待されること
語彙	・単語の一覧 ・語彙の重要度を踏まえた選定	・単語の読み方 ・語彙定着の言語活動 ・日本語訳以外の意味記述
本文	・忘れられない，見過ごせない大切なテーマの提供 ・音読，暗唱のための良質のテクスト	・もっと一人称の語りを多くして生徒の取り込みやすいことばに
評価・目標	・学習達成目標の提示	・生徒にもわかる評価の基準
文法・基本文	・簡潔な説明 ・巻末でのまとめ ・基本文定着の練習	・自学できるほどの説明と整理 ・文法の重みづけ，見直し
活動	・文法定着活動 ・機能重視の活動 ・タスク活動 ・テーマ追求型活動	・自由作文などの自己表現活動

これは私が 6 社の教科書を通読した解釈であって，人によって違いはあろうことをお断りしておきます。その上で，教科書が基礎学力を養う上で特に重要になる，語彙，文法の 2 点について，何を先に教えなくてはならないか，何を教えることが後の学習負担を減らすのかを検討しましょう。本文のテーマや言語活動は縦に積み上げる系統性が乏しいですが，文法や語彙は系統性次第で，生徒の表現力を大きく変えますので，基礎学力を定義することは，これらの項目間の優先順位を明確にすることになると思います。

この語彙と文法については，次の項目で説明します。また，教科書の「本文」については杉本薫氏に，「基本文」については日臺滋之氏に，また上記の枠にとらわれない「教科書の創造的な使い方」につい

ては室井美稚子氏に，詳しく述べていただくことにします。

3. 基礎学力に迫る方法

仮にここでは，応用･発展に対する基礎の定義を，ほかよりも先に指導すべきこととして，語彙，文法について具体的に考えてみましょう。その際，教科書が果たす役割として「指導内容の選定」「指導方法や学習活動の提供」の 2 つを軸にして基礎学力にアプローチします。

(1) 語彙の選定と指導について

【語彙選定】 900 語程度の単語が教科書には載っていますが，何を先に教えるべきでしょうか。語彙選定にはコーパスを活用し，900 語を表現語彙，理解語彙，話題語彙（*NEW CROWN* の場合は，指導書の解説・活用編に記載）などのカテゴリーで重要度を示しているケースもあります（詳しくは日臺 2006 [*1] 参照）。

近年のコーパスに基づく語彙の分類研究は，基礎とは何なのかという問いに答えてくれます。例えば，石川慎一郎氏の作成した「小学校英語のための基礎語彙 1850（KUBEE1850）」[*2] などのように，日本の子どもたちに適した語彙指導を考えるベースとなるもの。また，語彙の頻度（frequency）ばかりではなく，親密度（familiarity）をデータベース化した横川ほか（2006）[*3] の研究のように，語彙指導に確かな根拠を与えてくれるものがあります。

above を例に考えてみましょう。この単語は，使用されている教科書と使用されていない教科書があり，中学で習うかどうかのボーダーライン上にある語といえます。機能語なのに意外ではないでしょうか。前置詞の中では about ほどではないにせよ，above も大事な語彙のように思われます。横川らの研究によれば，above は頻度こそ高いのですが，実は日本人学習者にとっては親密度の相当低い単語になっていることがわかります。「上」を表す別の語，up や over の方が，頻度も親密度も遥かに高く，above は隠れた存在になっていることがわかります。KUBEE1850 でも頻度については同様のことがいえます。また KUBEE1850 は，小中連携で苦労する教育現場に教科書が応えきれていない部分を補ってくれる存在でもあります。小学校英語活動を経験して入学した生徒たちの語彙力を測る際にも参考になりそうなリストです。

【語彙指導】 語彙学習の活動提供は，語彙選定と同様，とても大切な教科書の役割です。表現力育成を重視する人は動詞や名詞の指導を優先するでしょうし，文法文型指導を重視する人は代名詞や前置詞をむしろ大切と考えるかもしれません。指導のあり方と語彙の重みづけは深く結びついています。教科書に用意されている言語活動は，文法，機能と関係づけられているものが多いように思います。そこで，語彙の用法を生徒に実感させて表現力の基礎を育てるためには別の活動を用意する必要があります。語彙理解を日本語訳まかせにしてしまっては，学習者の語彙理解は深まらないからです。「表現語彙」の中でも頻度や親密度が高い語に絞って言語活動を組むなど，的確な語彙選定と意味用法を実感できる活動づくりが，今の教科書にもう一工夫すればできるのです。

(2) 文法の指導について

次に文法の指導について考えてみましょう。教科書は，文法項目の選定，配列，指導方法について長年の積み重ねがありますから，もう完成された感があるかもしれません。文法項目一覧を見ると，1 年次は，SV，SVC，SVO の基本文型について，それぞれ平叙文，疑問文，否定文を学ぶことがまず基本です。そして，文を作る上で重要な要素として，代名詞や Wh- 疑問が教授され，表現の幅を広げる過去形，進行形，助動詞が加わるといった具合です。1 年次の文法を使えば，自分や家族の紹介をしたり，過去の出来事について日記を書いたり，友人と簡単な会話ができるようになります。即興性はまだ望めませんが，準備を丁寧にすれば，1 年の終了時でも，単純なパターンの繰り返しながら，かなりの表現が可能になるような文法の選定がなされています。

指導順序と方法についてもうまく構成されています。言うまでもありませんが，平叙文の語順をしっかりと定着させることが，その後の疑問文，否定文指導，進行形や助動詞の導入をスムーズにするために大切ですので，平叙文指導は疑問文，否定文指導のための「基礎」になります。文法指導については，

文型（語順）の定着の観点からみると，基本構成は適切であることがわかります。

しかしながら，全く問題がないわけではありません。基本文から漏れている文の要素ながら，実際の表現活動では重要な役割を果たす,「どこで」「いつ」などの修飾句の扱いが教科書によって差が見られます。文法構造上の「基礎」ではないかもしれませんが,「どこで」「いつ」といった要素は，Wh- 疑問や過去形の導入により，どんどん使う機会が増えてきます。1 学期には “I play tennis.” と級友が発話するのを聞いて「ああ，彼はテニス部か」と納得できていたものが，3 学期になって “I played tennis.” と言うとなると，それでは聞き手は納得できなくなります。コミュニケーション上は，修飾句こそが重要な情報を伝えるようになりますから,「どこで」「いつ」といった要素は，基本文型と同様しっかり定着させなくてはならない「基礎」であることがわかります。田尻悟郎氏の『自己表現お助けブック』*4 などは，伝えるメッセージをどの語順で表現するかという視点で文法を捉えることの大切さを教えてくれます。

また，1 年生段階の文章表現では，長く複雑な名詞句が主語になることはなく，たいていが人称代名詞か短い名詞句になりますので，人称代名詞の習得は 1 年次の自己表現力を支える「基礎」といえるでしょう。人称代名詞は「文法のまとめ」などのページに整理して提示されている教科書がほとんどですが,「どこ」「いつ」の前置詞句と同様，人称代名詞も，基本文に登場しない「隠れた文法の主役」として丁寧に扱う必要があるでしょう。

(3) 補足

基礎学力を身につけるための教科書活用を考える上で大切なことをひとつ補足します。それは，文字で書かれた単語を音読できるようにして，生徒がひとりで教科書を活用できるようにすることです。

1 年次の最初のひと月あまりは教科書を使わないという先生の話をよく聞きます。「ゴールデンウイーク明けくらいかな」とおっしゃいます。そういう先生は，中 1 最初にしなくてはいけないことは「英語は読めるんだ」という実感と自信を生徒に持たせることだとして，フォニックスをはじめとする文字音声指導を徹底されます。多くの教科書は, アルファベット，クラスルームイングリッシュ，身の回りの英語，歌などを LESSON 1 の前に導入して，学習者への動機づけや基礎的な事項の指導を行います。しかし, 英語を学び始めたばかりの中学生にとって, 英語のインプットは音声経由と文字経由がほぼ同時期に始まりますので，単語を読み慣れない生徒は，インプット量の点で最初からハンデを負うことになります。前述の先生は，レッスンが始まっても，新出単語とは別に，フォニックス用の単語カードセットを使って読めるようになるまで指導を続けます。単語が読めることは，現在の教科書を使った英語学習には不可欠な条件です。読める単語の音節数を増やしつつ，初見の単語を音声化できるようになるまで導きたいものです。

こうしてみると，1 年生は，実にたくさんのハードルを越えて 2 年生の学習課程に進んでいくことがわかります。2 年次に文法や語彙が難しくなって，英語が苦手になる生徒が増えるというよりも，1 年次のこうした隠れた基本の積み重ねが十分でないがために，2 年生の内容を咀嚼できなくて苦手になるのかもしれません。幸い，ここまで語彙と文法を例に挙げて見てきたように，教師が多少補足すれば，教科書の指導内容の選定も指導方法も，どの教科書をとっても，よく吟味されたものであることがわかります。単語を読めるようになる指導は 1 年間通してしっかり続けるとして，入学時の生徒の語彙知識を把握し，基本表現語彙を使えるようにする指導や，基本文型に修飾句も加えて定着を図ることを心がけることで，基礎学力の指導ポイントは押さえられそうに思えるのですがいかがでしょうか。

4. 教科書の徹底活用のためのカスタマイズ

教科書は英語での総合的なコミュニケーション活動へ至る道のりを支援する手引き，言語知識のデータベースとしての役割を十分果たしていると思います。英語を教える教師の立場からすれば，教科書は言語活動，言語知識を提供してくれる頼りがいのある存在でしょう。実情に合わない部分を改善し，前述のような補足修正をすれば，生徒の英語学力養成の基盤を担ってくれるはずです。

一方で，教科書が生徒たちにとって，「学びの友」になっているかどうかを考える必要もあるでしょう。徹底活用する主役はむしろ生徒たちですから，かれらにとって身近で不可欠な存在でなくてはなりません。教科書の中には，学習のポイントや到達目標を生徒にわかりやすく示したものもあります。そういった試みにより，生徒自身が学習活動の意義や効果を理解しながら教科書を使うことができるようにすることは今後も大切になるでしょう。私たちの学生時代を振り返ってみてもわかりますが，切羽詰まって目の色を変えて勉強しなければいけないときほど，教科書ではなく参考書やワークブックに向かったのではないでしょうか。一目見てポイントがわかること，必要十分な知識が整理されていること，技能知識の定着に結びつく練習が個人でできることなど，教科書よりも参考書やワークの方が向いている点はいくつもあります。その点では，今の教科書も，生徒にもわかりやすい，使いやすい編集がなされていると思いますが，例えば新出単語を覚えやすくリストにしたプリントを配布する，基本文を生徒の生活により身近な文に換えた暗唱用ワークシートを作るなど，教師や生徒自身が教科書をカスタマイズすることによって，参考書やワークに負けない「自分の教科書」づくりができれば，なお活用に弾みがつくのではないでしょうか。

5. おわりに

英語の教科書は，他教科の教科書よりも身近な存在であるように思います。「中学校のとき，どの教科書使ったか」と聞かれて，出版社名でもその内容でもなく，まるで小説のように，教科書のタイトルや登場人物の名前が思い出されるのは英語科くらいでしょう。英語だけは「英語」ではなく *NEW CROWN* などの名前がついています。英語の教科書は，それを両手に持って自宅でひとりで，あるいは教室でクラスメートたちと一緒に音読したり，教科書を閉じたり開いたりしてリスニングや暗記をしたり，あちこちに書き込みをしたりと，ほかの教科書にはない，その隅々まで全部取り込むような活用をするように思います。英語教科書は特別な存在感をもっているのではないでしょうか。自らが望めば，身近な生活の中に英語が頻繁に大量にある現代においてさえ，やはり，入門期の学習者に良質の言語材料と，その指導・学習の方法を提供している中学校英語教科書の価値は損なわれるものではありません。むしろ，英語が大量にあるからこそ，精選の極みを目指している教科書の意義は高まるのだと思います。

本稿では，特に語彙と文法項目の選定と指導方法を中心に，中学英語の「基礎」を議論してきました。何を優先して教えるべきなのかという問いへの答えを「基礎」と位置づけ，コーパス活用や，語順指導や代名詞などを例に，それらがなぜ重要なのかを考えました。また，音声と文字を結びつける指導が生徒を教科書活用のスタート地点に立たせるために不可欠なことなどを加え，基礎学力と教科書活用の関係を述べてきました。このような教科書が提供する題材の背景にある意図や基礎研究について理解することは，教科書リテラシーを上げることになります。そして，その理解を基に，自分の指導や学習に足りないことや補足すべきことをさらに加えて，自分たちだけに特別な教科書をカスタマイズしてください。教科書を生徒にとって愛着の止まない思い出深い学びの友に育てていくことを，今年の先生の教育目標とするのはいかがでしょうか。

【参考文献】
＊1　日臺滋之（2006）『生徒の語彙力を伸ばすために』Teaching English Now 特別増刊号 Vol.1
＊2　石川慎一郎『小学校英語教育のための基礎語彙表1850』
URL http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kubee.html
＊3　横川博一ほか（2006）『日本人英語学習者の英単語親密度　文字編』くろしお出版
＊4　田尻悟郎（2005）『自己表現お助けブック―英語がわかる！』教育出版